

オリンダ通信

「小井沼眞樹子宣教師と共に歩む会」会報

創刊号

共同代表: 松本敏之、大倉一郎
 事務局: 横浜港南台教会 秋吉隆雄
 〒234-0054 横浜市港南区港南台 7-8-29
 Tel 045-833-5323 Fax 045-833-6616
 郵便振替口座番号: 00210 - 2 - 97571

ノルデステ、オリンダのことなど

経堂緑岡教会牧師 松本敏之

私は、1996年サンパウロ福音教会の牧会を、小井沼國光・眞樹子牧師夫妻に委ねて辞任し、日本へ一時帰国した後、約1月かけてブラジル北東部(ノルデステ)のメソジスト教会とその関係施設を視察旅行した。ブラジル・メソジスト教会が、すでに私を宣教師として受け入れることを決定していたので、その具体的な任地を決定するための旅行であった。

ノルデステは、同じブラジルといえどもサンパウロなど南部とは別世界である。ブラジルは広い。サンパウロからノルデステ海岸の真ん中あたりに位置するレシフェ/オリンダまで約2100キロ。鹿児島の最南端から北海道の最北端までの距離である。私は、バスで行ったので40時間以上もかかった。総面積は155万平方キロメートルで、これは日本の総面積の約4.1倍。これだけの広さが、ブラジル・メソジスト教会の一教区となっている。私は、結局、ノルデステ視察旅行の最後に訪ねたオリンダのアルト・ダ・ボンダーデ教会とカイシャ・ダグア教会に着任することとなった。

ブラジルには、「貧しい北と豊かな南」という「北南問題」がある。ノルデステは、人口が密集する地域としては世界最貧地域のひとつだそうである。教会の課題も大きい。同時にノルデステはブラジル人にとって不思議なつかしさがあがり、魂のふるさとのようなところだ。何といってもブラジル文化発祥の地である。1500年にポルトガル人、P・A・カブラルがインド遠征の途中で発見したのもノルデステの南の方(ポルトセグーロ)であったが、その後ポルトガル人が最初に住み始めたのは、まさにオリンダのすぐ近くであった。その海岸には「ブラジルは、ここから始まった!」という立て札が立っている。

オリンダは、ペルナンブッコ州の州都レシフェの北に隣接する街であるが、歴史的に言えば、オリンダからレシフェへと広がっていった。オリンダはブラジルで最も古い街の一つで、1537年ポルトガル人入植者

によって建てられた。17世紀前半に24年間、オランダ人によって占領されていたため、旧市街の一面には、ポルトガル、オランダ双方のコロニアル建築がのこされ、それぞれのスタイルの教会や修道院が今も静かにたたずんでいる。オリンダという名前は、初代知事が丘の上からの眺めを「オー、リンダ!」(何と美しい)と感嘆したことに由来すると言われ、その美しい街並みはユネスコの「世界遺産」にも指定されている。

レシフェ/オリンダは、カトリックの基礎共同体運動の創始者の一人であるドン・エルデル・カマラが大司教を務めた街としても有名である(今年は、カマラ大司教の生誕100年!)。彼は、軍政時代、国内では言論活動を禁じられていたが、世界中を飛び回って、囚人の拷問や社会不正義を告発してきた。また民衆の識字教育と意識改革の運動で有名なパウロ・フレイレもレシフェの出身である。

小井沼さんご夫妻とのご縁は、本当に不思議のものである。小井沼さんご夫妻は、サンパウロ福音教会で私の後任牧師となられたが、実は小井沼さんご夫妻は私よりも前に信徒としてサンパウロ福音教会におられ、私の招聘手続きを中心になってくださったのは他ならぬ小井沼國光さんであった。私がアルト・ダ・ボンダーデ教会に行くことを決めたのは、眞樹子さん同様、ジャニ・メネゼス姉との出会いが大きい。眞樹子さんは私よりも前に、ジャニとリオデジャネイロで出会っておられたのである。まさに、「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」(マタイ 20:16)という感じである。皆さんも、ぜひこれからの眞樹子さんの活動を祈りに覚え、応援していただきたい。



海辺の黙想

オリンダに着いてから1ヶ月が過ぎました。昨年4月から8月初旬まで(5月を除いて)3ヶ月間この地に滞在して生活実習をしましたので、新しい土地に来たというより、半年ぶりにオリンダに戻ってきたという感覚でした。アルト・ダ・ボンダーデ教会の人々も「マキコはいつ戻ってくるのか」と何度も信徒リーダーのジャニに尋ね、待っていてくださったそうです。

ですから新しく教団の宣教師として派遣されてきたというような改まった空気はどこにもなく、昨年の続きのような感覚で受け入れられました。

昨年アパートに最低限必要なものは揃えたので、固定電話の設置とインターネットの機器の取り付け、そしてNHKの国際放送を観るためのケーブルテレビとの契約などが懸案の課題です。ところが途中でいろいろ問題が起り、解決するのに3週間もかかりました。やっとNHKがテレビの画面に映った日は、とても精神的にほっとした感覚を味わいました。ブラジル語のニュースではもうひとつ意味がつかめず、社会から浮いたような気持ちでいましたから。

半年間日本語づけになっていたのではじめは思うように出てこなかったポルトガル語も、日常会話の初級レベルはなんとか回復してきました。

まだ私に教会の仕事の割り当てはなにもなく、ただ、日曜日の午前中の教会学校と夜の礼拝、火曜日の祈禱会、金曜日の信徒養成会(いずれも夜)に参加して皆の話す言葉に聞き耳を立てているだけの生活です。なんだかずっと休暇をもらっているような、本当にのんびりした生活で申し訳ないようです。

3月29日(日)にビスパ(教区長)マリーザが来て、私の歓迎礼拝をする予定が、1週間延びて4月5日になりました。私の初仕事は31日(火)の祈禱会での奨励で、12日にはパスコア(イースター)礼拝の説教を担当することになりました。

ここルデステ(北東部)の生活では、時間も空間も物事もゆったりとおおらかに動いています。3分おきに電車が到着して、次々に運ばれていく日本の生活とはなんと違うことでしょう。

私は毎朝5時半に起きて、1時間海岸沿いを散歩します。朝寝坊だった私のこの変わりよう! 広い大西洋の海原を眺めながら、神様の愛の広さ深さに思い

を馳せ、感謝でこころ満たされます。砂粒のような自分の小ささを黙想し、ここに置かれていることの不思議を思い巡らしています。



オリンダの海岸、朝の散歩道

敬愛する先達の宣教師からの次のような祝福の言葉が届き、それを日々噛みしめています。

「宣教師ははじめから自分の限界を背負って出かける人間ですから、言葉とか、習慣とか、その地の文化などの点で誰よりも遅れている人間です。何を『福音』として持っていくのか。『愛のあかし』だけだと思います。自分の場所にいるときは、自分が学びえた知識だとか学問だとか、言葉のあやだとか、とにかく自分を輝かせるたくさんの『部下』に囲まれていてそれをいわば食物にして生きていけるかもしれません。宣教師はそれをすべてあきらめたので、神様の前でもっとも貧しい人間としてひたすら祈りによって神様とのつながりを第一にして歩きます」。

★ここに至るまでの経緯

(08年4月発行「オリンダ便り」No1より抜粋)

1996年、夫と共にサンパウロ福音教会に赴任してまだ間もない8月に、ブラジルのリオデジャネイロで世界メソジスト大会が開かれました。本大会の前に女性大会が開かれて、全世界から500名の女性リーダーたちが一堂に会し、私も日本からの参加者といっしょにその女性大会の末席にいたのです。

ある日の食事の席で、向かい合わせに座った女性と話をしました。彼女は、夫がアメリカ人宣教師でオリンダの貧しい地区で教会活動をしていたが、4年前に不慮の事故で感電死してしまったと話していました。それがジャニでした。

同年レシーフェ/オリンダを訪問し初めてアルト・ダ・

ボンダーデ教会と出会いました。

そのすぐ後に、サンパウロ福音教会を辞任された松本敏之牧師とご家族が、教団宣教師として正式にアルト・ダ・ボンダーデ教会に赴任されたのです。広大なブラジルで宣教地の可能性がいろいろあった中で、この巡り合わせもまったく予期せぬことでした。若い牧師一家の二年間の良き奉仕が共同体の人々のところに深く刻まれたことは言うまでもありません。松本牧師夫妻が退任されたあとも、私は日本からの客人と共にこの地を訪問し続けました。

そして、私たちにとって決定的な出来事が起こります。2004年12月、夫の病気が難病であることの告知を受け、回復の手立てがなく帰国しなければならなくなったこと。この困難な状況下で、ジャニがサンパウロに出向いた際にサンパウロ福音教会に立ち寄ってくれたのです。彼女は心理学の専門家で、しかも夫との死別を早くに体験した人です。こんな良い友がいて私を気遣ってくださり、本当に有難いことでした。

2006年3月に帰国後、予想よりはるかに早く、8月24日、國光は天国を望んで旅立っていきました。「ブラジル宣教を自由にやりなさい」と言い残して。さらに、遺族年金という形で宣教生活の経済的基盤を用意してくれたのです。

10月、「ラテンアメリカ・キリスト教」ネット発足後まもなく、事務局の大久保さんと一緒に再びオリンダを訪問しました。礼拝の後に、「夫の介護生活をしている時も、困難な現実の中で信仰によって力強く生きている皆さんのことを思い、大きな支えとなりました。」と一生懸命感謝の気持ちをボ語で言い表しているうちに涙がどっとあふれ...すると、教会の人たちがみんな私の周りに寄ってきて、次々に抱きしめてくれたのです。忘れることのできない体験でした。

次にこの地を訪れたのは2007年6月。國光の1周年記念誌を出版するためにサンパウロに滞在していたときのことです。そのとき、ジャニから、メソジスト教会のノルデステ教区は経済的困難に直面していて、一個教会に一人の牧師を任職させることができなくなりイヴァン牧師がカイシャ・ダグア教会と兼任になったことを聞かされました。その結果、牧師は月に一度礼拝説教と聖餐式を担当するだけであとは信徒たちで教会活動を続けているというのです。私は次の宣教奉仕の可能性をノルデステに探していること、教会から謝儀をもらわなくても働けることを伝えると、ジャニはとても喜んで、ぜひ来てくれないかと言います。そして

さらに驚くことに、ちょうど階下のアパートが売りに出ている、ジャニは私の話を聞いてその晩のうちに契約の手続きを始めてしまいました。彼女が買っておいて私が借りるという段取りです。あまりの急な話の進展に「待った」をかけて、もう少し日本で周りの人たちや家族ともよく話し合ってから返事をするを約束して帰ってきました。



朝のカフェ。左からイヴァン牧師、アルジーラさん、ジャニさん

数ヶ月間祈ってよく考えた結果、やはりブラジル宣教への私の意思は変わりませんでした。それどころか、日本での教会赴任の話が持ちかけられるたびに、思いが強まるのです。ブラジルと日本の教會的交流と連帯のために動ける人間は、いまのところ私しかいないことは確かです。また、かねてより宣教師として一度は日本語をまったく使わない貧しい共同体で奉仕したいという夢を持っていました。夫の与えてくれた自由と宣教資金を實踐に用いることなく、別の道を選択することなど考えられませんでした。こうして心身の健康もなんとか整えられて、昨年の実習が実現しました。

そして9月に帰国後、日本基督教団とブラジルメソジスト教会との間で書類が取り交わされて、10月に宣教師として正式に派遣が決定したとき、「大きな意志が働いている」と、胸打ち震える思いで受け止めました。まだ先の見通しはなにも見えてきませんが、「ここにいるだけでいい」と思い、ゆっくり歩いています。

MAKIKO KOINUMA

Av. Dr. José Augusto Moreira, 66 Ap102

Casa Caiada, Olinda-PE 53130-410

Brasil ☎55-81-3495-0312

(メール・アドレスは省略しています)

「小井沼眞樹子宣教師と共に歩む会」規約

- | | | |
|-----|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| 第1条 | 名称 | この会を「小井沼眞樹子宣教師と共に歩む会」とする。 |
| 第2条 | 目的 | この会は、小井沼宣教師がブラジルで活動することを支援し、日本の教会および知人に伝えることを目的とする。 |
| 第3条 | 所在地 | この会の所在地を横浜港南台教会、神奈川県横浜市港南区港南台7-8-29
郵便番号234-0054 に定める。 |
| 第4条 | 世話人 | この会の当初の世話人は以下のとおりである。
代表 松本敏之（共同代表）、大倉一郎（共同代表）大久保徹夫、渡辺英俊
秋吉隆雄（事務局）、今井俊子（書記）、原 淑子（会計） |
| 第5条 | 会費 | 年会費を一口1000円とする。献金、寄付金は常時受け付ける。 |
| 第6条 | 会報 | 会報を年2回発行する。 |

会 計 報 告 (2008.12.24~2009.4.5)会計担当：原 淑子
(会計報告の詳細は省略しています)

年会費献金者名（敬称略、順不同）
(献金者名は省略しています)

編集後記

事務局 秋吉隆雄

眞樹子師は宣教師としてブラジルのアルト・ダ・ボンダーデ教会に赴任されました。夫の国光師は天を望んで、輝くような顔で召されて逝かれました。病床に幾度か訪ね、話をしました。その会話の中で、フッと眞樹子師は一人でブラジルに行く時が来るのではないかと思いました。予感通り、単身ブラジルに行くことになりました。赴任する教会には日本人はいません。ブラジル人にポ

ルトガル語で伝道、牧会する使命を持って行かれました。眞樹子師の勇氣ある決断に心から敬意を表し、神さまからの導きと祝福を祈ります。

「小井沼眞樹子宣教師と共に歩む会」を松本敏之牧師と大倉一郎先生に共同代表をしていただき、横浜港南台教会が事務局を担当し、上記の規約を定めて立ち上げました。眞樹子師のご活躍を皆さまにお伝えしたいと思います。先に発足した「ラテンアメリカ・キリスト教ネット」と共にご愛読、そしてご支援ください。